

北山鹿苑寺方丈の地中には

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真1 慶長期(江戸時代前期)の方丈基壇

はじめに、鹿苑寺は舍利殿「金閣」がよく知られることから、金閣寺と呼ばれています。臨済宗相国寺派の寺院で、正式には北山鹿苑寺と号します。その歴史性と建物群や自然景観が調和した境内は、1994年にユネスコの世界文化遺産に登録されています。

この地は、古く平安時代は神祇官に仕えた伯家の領地であり、鎌倉時代には後の太政大臣西園寺公経の北山第、室町時代には室町幕府三代将軍足利義満の北山殿が造営されました。そして義満没後に

は鹿苑寺と名を替え、現在まで法灯を繋いでいます。

2007年には方丈(本堂)が特別公開され、多くの人々が新調された杉戸絵などその室内を拝観しました。これは、2004年から行なわれた方丈大修理が完了したことによりです。方丈は部分的な修理は度々行なわれていましたが、今回の修理は、建物全体を解体して基礎部分から補強するという大規模な事業でした。この方丈を解体したことで、地下遺構を確認する発掘調査が可能となりました。

これまで鹿苑寺境内では、金閣の北側などを含め10次の調査が実施され、修羅の発見など大きな成果を得ていました。今回の調査地である方丈は、鏡湖池の東岸に近接し、庫裏・書院・唐門などと接する鹿苑寺境内の中心部分に位置しています。

では、調査順に時代を遡って見ていきましょう。

延宝期以降の方丈(写真2)建物解体直後の基壇面で、礎石の他に礎石を抜き取った跡とみられる窪みを多数発見しました。礎石の

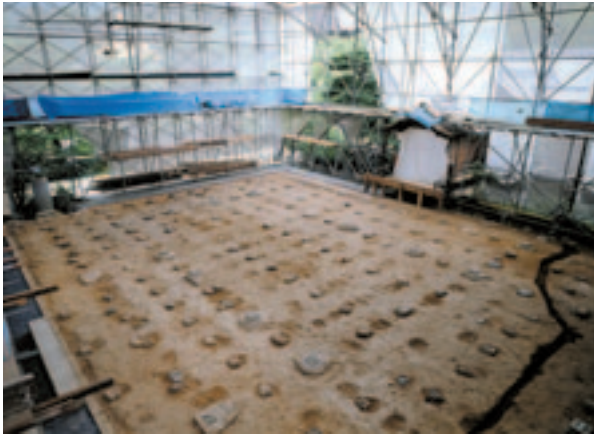


写真2 延宝期（江戸時代中期）以降の方丈基壇



写真3 応仁の乱後（室町時代後期）の礎石と雨落ち溝

据え替え状況を検討した結果、この基壇面では大小数回の修理があったことがわかりました。また、基壇盛土内の遺物から、17世紀後半に造成された基壇であり、この建て替えて基壇を現在の高さまで盛り上げたことが判明しました。『鹿苑寺由緒書』によれば、延宝6年（1678）に後水尾院の寄進を受けて建て替えが行なわれており、これに相当すると考えられます。

慶長期建立の方丈（写真1）次に、礎石のない位置に幅1m未満の狭い範囲で掘り下げを実施しました。その結果、地下約0.7mで、江戸時代前期の基壇を発見しまし



写真4

応仁の乱以前（室町時代中期）の基壇と礎石

た。基壇上では礎石や礎石抜き取り穴を多く検出し、前身の方丈とみられる東西棟の建物などを発見しました。建物はさらに西側に延びており、南側には雨落ち溝、東側には中庭や蹲踞^{つくばい}があり、庫裏と推定される建物の西端も発見しました。この面でも、礎石抜き取り穴の配置から数回の修理が行なわれたことがわかりました。『鹿苑日録』によれば、慶長7年（1602）に庫裏とともに新造されたとあります。

応仁の乱後の建物（写真3）下層遺構の調査は、江戸時代の遺構面の保存を優先したために、さらに狭く部分的な掘り下げとなりました。ここでも建物の基壇を検出しました。基壇の版築には焼土が含まれ、遺物は室町時代後期に属することから、応仁・文明の乱後に再建した建物とみられます。南北方向に長く礎石や抜き取り穴が並ぶことから、廊の可能性がります。柱間は7尺（約2.1m）で金閣と同じです。基壇西側には雨落ち溝があります。『応仁記』には応仁・文明の乱の兵火により、金閣以外の建物は焼失したと記されています。

義満期の建物（写真4）室町時代後期の基壇を部分的に掘り下げ、さらに古い時期の基壇を検出しました。これも南北方向に長く礎石や抜き取り穴が並ぶことから、廊と考えられます。礎石は長径50cm以上あり、今まで検出した礎石中では最も大型です。北山殿（義満期）の中心的な建物の可能性があり、室町時代中期の建物は、鹿苑寺境内では初めての発見です。

西園寺期の整地層を発見 さらなる掘り下げで整地層を検出しました。面積が狭いために礎石は検出できませんでしたが、層位的に鎌倉時代の北山第（西園寺期）の建物基壇の可能性が高いとみられます。

おわりに 方丈基壇の下層には、鎌倉時代以降の基壇整地層が水平に堆積し、北山第、北山殿、鹿苑寺と続けて各時代の遺構が良好な状態で遺存していることがわかりました。これまで境内では、室町時代以降の建物を多く発見していますが、いずれの建物も柱筋の方位は金閣と同じであり、いつの時代の造営事業も金閣を中心に据えていたことが窺えます。

（小檜山一良）